

授業科目名	生活とデザイン	担当教員名	五十嵐 潤
授業科目区分	教養科目—歴史と文化科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次後期（25年度）	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ デザインを生活の中に「ときめき」をもたらす仕組みとしてとらえたとき、クリエイティブな世界に向かおうとするものにとって、デザインの着眼、発想とはどのようなものか、そしてそれらが社会にどのような影響を及ぼすのかを理解することを目的とする。</p>			
<p>授業の概要 生活の諸相にデザインが関わっていることを認識し、日々の暮らしにおけるデザインの基本理解を進める。各種メディア、道具、空間といった多くの媒体によりデザインと日常的に関わることになった今日、デザインの果たす役割を学ぶ。高度成長期から成熟した情報化社会の現在に至る過程で、デザインの役割も変遷している。デザインを生活における課題解決の方法と考えたとき、デザインと個人、デザインと社会はどのような関係にあるのかを考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回 生活者への視点～今和次郎と考現学 第2回 デザイナーの誕生～歴史的背景について考える 第3回 第2次大戦後の復興期の生活とデザイン 第4回 経済成長期の生活とデザイン 第5回 大量生産、大量消費～大衆とデザイン 第6回 メディアとデザイン 第7回 高度情報化社会の生活とデザイン 第8回 人の行動や心理からデザインを考える 第9回 ユーザビリティとは何か？～インターフェースを考える 第10回 企業活動～デザインとマーケティング 第11回 テクノロジーのイノベーションとデザイン 第12回 社会を変えるデザインの取り組み1～デザインに何が可能か？ 第13回 社会を変えるデザインの取り組み2～持続可能な社会の実現とデザイン 第14回 社会を変えるデザインの取り組み3～他の90%のためのデザイン 第15回 まとめ</p>			
<p>履修上の注意</p>			
<p>テキスト 授業内容により適宜配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等 「考現学入門」、「世界を変えるデザイン」、「誰のためのデザイン？」</p>			
<p>学生に対する評価 レポート課題（60%）及び試験（40%）により評価する。</p>			

授業科目名	デザイン史	担当教員名	天貝義教
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次後期（25年度）	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 産業革命以降のデザインの基礎的な概念を理解するとともに、その歴史を学ぶことによって、デザインについての基礎知識を身につけることを目指す。			
授業の概要 この授業では近代デザインの画期的な歴史的事項を概説するとともに、それらの背景にある主要なデザイン理論からデザインの基礎的な概念をとりあげて平易に解説する。			
授業計画 第1回 デザイン史を学ぶ意義について 第2回 産業革命における技術革新と造形意識の変化 第3回 芸術と産業（1）：万国博覧会と近代デザイン 第4回 芸術と産業（2）：モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動 第5回 芸術と産業（3）：ウィーンにおける応用美術の振興 第6回 歴史主義からの脱却：アール・ヌーヴォーとセセッション運動 第7回 様式主義から規格化へ：ドイツ工作連盟の設立とその理念 第8回 1920年代の動向（1）：バウハウスの設立 第9回 1920年代の動向（2）：バウハウスの発展 第10回 1920年代の動向（3）：近代デザインとモダン・アートの交流 第11回 アメリカにおける近代デザイン：ビジネスとしてのデザインの発展 第12回 第二次世界大戦前の日本：応用美術と意匠図案の国家的振興 第13回 第二次世界大戦後の日本：戦後の復興と近代デザイン理念の普及 第14回 ポスト・モダニズム以降：デザイン概念の拡張とデザインのモラル 第15回 まとめ			
履修上の注意 教員免許状取得のための選択科目			
テキスト 阿部公正『世界デザイン史』			
参考書・参考資料等 出原栄一『日本のデザイン運動』 J・ウォーカー『デザイン史とは何か』 T・ハウフェ『デザイン史入門』など			
学生に対する評価 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			

授業科目名	日本美術史	担当教員名	志邨 匠子
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次後期（25年度）	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
この授業では、先史時代から現代に至る日本美術の歴史を概観する。日本美術に関する基礎知識を習得するだけでなく、鑑賞を通じて、表現上の特色などを、自ら発見し理解に至ることを目標とする。			
授業の概要			
縄文時代から現代に至る日本美術（絵画、彫刻、工芸）について、主要作品を例示しながら授業をすすめる。また日本美術をより深く理解するために、美術作品に関する専門用語、作品の主題や背景についての解説をおこない、各時代の美術と社会との関係や異文化との交流など、アジアや西洋との関係も視野に入れる。			
授業計画			
第1回 縄文・弥生・古墳時代 ー土器，土偶，埴輪			
第2回 飛鳥・白鳳時代 ー仏教の伝来			
第3回 奈良時代ー唐文化の影響と天平美術			
第4回 平安時代Ⅰー密教伝来と貞観彫刻，藤原美術			
第5回 平安時代Ⅱー和様の形成と絵巻			
第6回 鎌倉時代ー鎌倉リアリズムと肖像画			
第7回 室町時代ー水墨画の移入と展開			
第8回 桃山時代ー障壁画と装飾性			
第9回 江戸時代Ⅰー琳派の系譜			
第10回 江戸時代Ⅱー文人画と写生主義			
第11回 江戸時代Ⅲー浮世絵の展開			
第12回 明治時代Ⅰー油絵の移入			
第13回 明治時代Ⅱー新しい日本画の創出			
第14回 大正時代・昭和時代Ⅰーアヴァンギャルドと戦時下の美術			
第15回 昭和時代Ⅱ・平成時代 ー戦後の美術の展開			
定期試験			
履修上の注意			
テキスト			
使用しない。（適宜，授業内でプリントを配布する）			
参考書・参考資料等			
授業内で適宜紹介する。			
学生に対する評価			
授業への取組姿勢（20%），試験（80%）により評価する。			

授業科目名	近代絵画史	担当教員名	志邨 匠子
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次後期（25年度）	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>明治期，西洋からもたらされた油絵技法により，日本人による「洋画」が描かれるようになり，伝統的な日本画も油絵の影響を受けながら展開する。一方，同時期の西欧では，浮世絵をはじめとする日本美術への関心が高まっていた。西洋における美術動向や日本美術からの影響にも触れながら，広い視野から日本近代絵画の諸相を考察することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>全体を通じて，明治初期から戦前までの日本絵画（洋画，日本画）について講じるが，西洋との関係性を考えるために，同時代のヨーロッパ，アメリカにおけるジャポニズムや，当時の美術動向にも触れる。また可能な限り同時代資料を紹介し，読み解いていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回 「美術」という概念－日本画と洋画</p> <p>第2回 日本洋画の創始－高橋由一</p> <p>第3回 技術から美術へ－工部美術学校と初期渡欧画家たち</p> <p>第4回 日本洋画の新派－黒田清輝と白馬会</p> <p>第5回 日本画の革新－狩野芳崖とフェノロサ</p> <p>第6回 日本画の洋風化－横山大観・菱田春草と岡倉天心</p> <p>第7回 日本美術のアイデンティティ－1893年シカゴ万博における日本美術</p> <p>第8回 ジャポニズムⅠ－フランス印象派と浮世絵</p> <p>第9回 ジャポニズムⅡ－後期印象派と日本美術</p> <p>第10回 ジャポニズムⅢ－ホイッスラーと日本美術</p> <p>第11回 水墨表現とモダンアート－橋本雅邦とアメリカ美術批評</p> <p>第12回 スードと美術－裸体画論争と日本的スードの展開</p> <p>第13回 個性の重視－白樺派と村山槐多</p> <p>第14回 日本的洋画の模索－萬鉄五郎と岸田劉生</p> <p>第15回 1930年代の日本美術－帝展改組と美術団体</p> <p>定期試験</p>			
履修上の注意			
<p>テキスト</p> <p>使用しない。（適宜，授業内でプリントを配布する）</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業内で適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>授業への取組姿勢（20%），試験（80%）により評価する。</p>			